

中央放射線部

1. スタッフ（平成25年4月1日現在）

部長 杉本 英治、仲澤 聖則
 技師長 増渕 二郎
 副技師長 神山 辰彦、高草木 浩、柳沢三二郎、
 川村 義文

放射線技師（総数）69名

中央放射線部は、画像診断部（核医学部門を含む）、放射線治療部門の2部門からなる。職員は、放射線画像診断医、放射線腫瘍医、診療放射線技師、看護師、事務職員など、職種が異なる総勢100名を越す職員で構成されている。

2. 画像診断部門の特徴

一般撮影、MRI、CTをはじめ血管造影（IVR）など、多種多様な検査を行っている。検査機器の配置も本館・新館救急・血管内治療部・OP室・子ども病院と病院全体に広がっている。各装置は常に最新の医療を行うべく変革が進んでおり、検査画像はすべて電子カルテから閲覧可能となっている。画像情報の利用に対する利便性の向上を常に進めており、増大する画像情報を常に高速で提供できるよう、システムの安定稼働に努めている。

一般撮影はCRからFPDへと更新が進み検査の迅速性向上に貢献している。無線系のFPDの導入も行っている。ICUにも、無線系FPD搭載のポータブル撮影装置を導入しポータブルでも撮影直後の画像確認を可能としている。装置の更新による検査時間の短縮が、検査件数の増加につながっている。

CTはすべて64列以上の装置となっており（4台使用）、心臓検査等も実施している。患者数は増加が続いており、3D画像もルーチンで作成を行なっている。手術ナビゲーション等にもCTデータの利用範囲が拡大してきており、重要性がますます増加している。

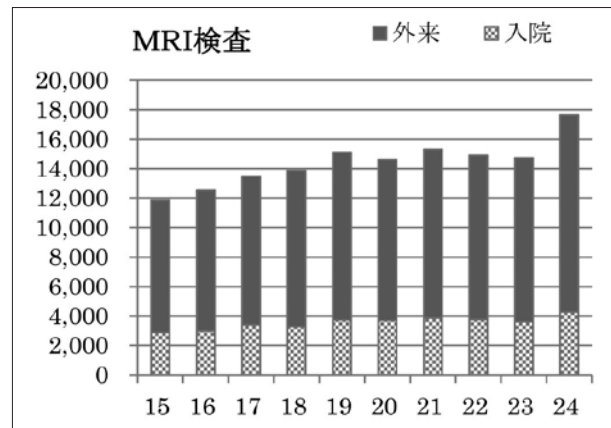
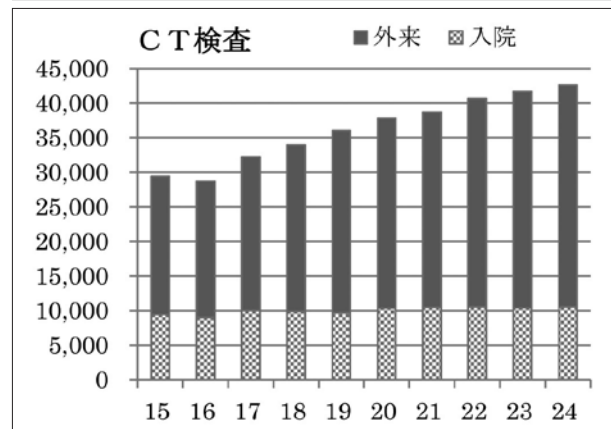
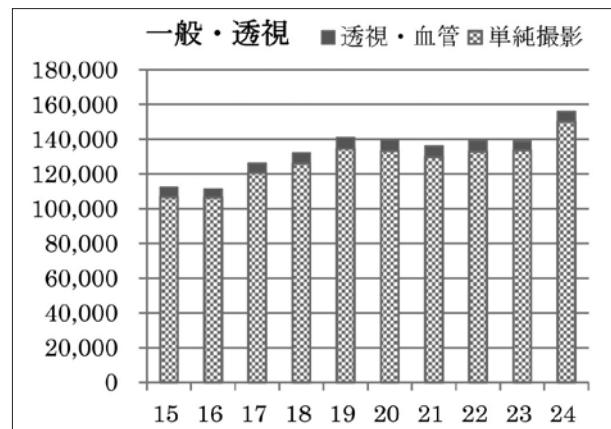
MRIは、西棟別館の完成に伴い3テスラの装置が2台追加で稼働した。本館5台（子ども1台）となる。結果、検査件数の増加もあるが、待ち期間の短縮が可能となった。（待ち期間が1か月半から1週間となる）

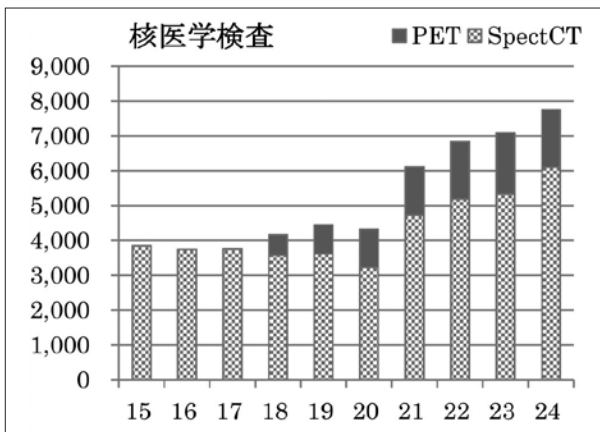
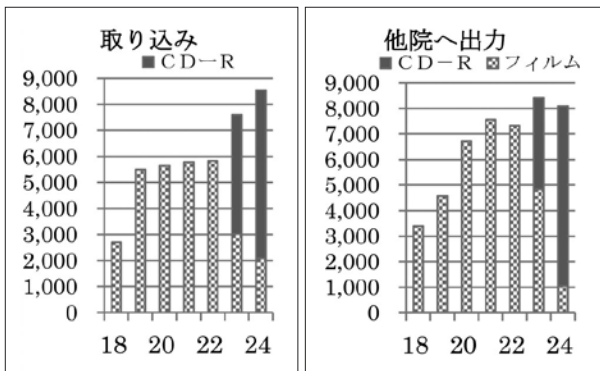
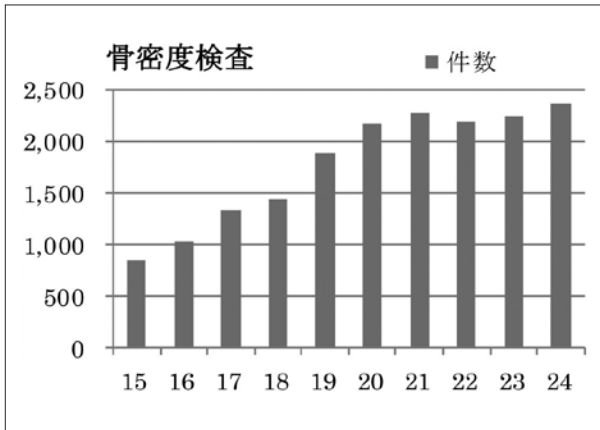
骨密度検査は、変わらず現状維持となっている。

他院との放射線画像のやり取りについて、3年前までは、フィルムで行っていた。CDにより直接デジタル情報を電子カルテ上に取り込み、CDにDICOMデータとして出力提供を開始して2年で約8割が移行した。数も増えており、今後、他院との地域連携もよりスムーズになるものと考えられる。取り込み画像の中に、CT、MRI画像が多くなってきており、当院での再撮の減少にも貢献しているものと思われる。

核医学は、ガンマカメラ2台（スペクトCT）とPET-CTが稼働している。検査の種類は多岐にわたるが、骨シンチが45%ともっとも多く、負荷心筋SPECTと続き、検査全体の7割に達する。最近では脳血流統計解析ソフトの活用やMRI・CTとSPECT画像のfusionが盛んに行われている。PET-CTも1日7件程度と、順調に稼働しており、全体としても核医学検査の重要性が見直されてきている。

3. 画像診断部門の年ごとの推移



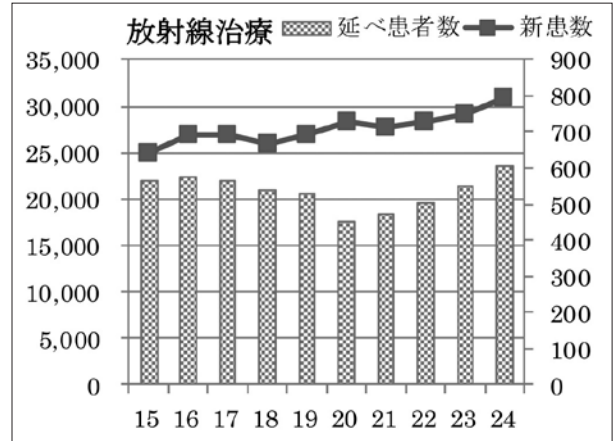


4. 放射線治療部門の特徴

治療部門ではライナック 3 台、腔内照射装置（新型コバルト線源）1 台での放射線照射を行っている。

ライナックは、装置の更新も 1 巡し、全身照射・定位放射線照射(頭部)に加え、体幹部定位照射(主に肺)、IMRT治療(主に前立腺)を行っている。今後IGRTへの対応を検討中であり、高精度放射線治療の適応拡大を進めている。患者数は増加しており、新患者(新規に放射線治療を開始した患者数)も、年間800名となっている。

5. 放射線治療部門の年ごとの推移



6. 今後の目標

放射線部門では、安全で安心な医療の提供を目標にスタッフの教育・研修を行うと共に、高度医療への貢献が必要と考える。診断部門では、検査時間の短縮、3D等複雑化、多様化する検査への対応。MRI棟(西棟新館)の稼働に伴う、MRI検査件数の増加。治療部門では、更なる高精度放射線治療の適応拡大を目標としたい。今後も、病院機能の一翼を担って行きたい。